日本宋代文学学会第7回大会プログラム

2020年11月7日（土）13：00〜17：00　オンライン

開会の辞　会長：東英寿

研究発表

13：10〜13：40

「范履霜」攷――范仲淹と琴曲「履霜操」

早川太基（日本学術振興会特別研究員(PD)）

13：40〜14：10

康與之作品編年試探

松尾肇子（東海学園大学）

14：10〜14：40

科挙と文学―唐宋の下第詩―

高津孝（鹿児島大学）

司会：浅見洋二（大阪大学）

第5回唐宋八大家シンポジウム

〔JSPS基盤研究（B）「唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究」主催、日本宋代文学学会共催〕

15：00〜16：30

司会：東　英寿

サクラ（桜花）の漢名をめぐる近世日本の議論と宋詩

慶應義塾大学　　合山　林太郎

歐陽脩は二重人格か―詞の作成場面と受容環境に着目して―

九州大学　　東　　英寿

総会

16：40〜

発表要旨

「范履霜」攷――范仲淹と琴曲「履霜操」

早川太基

范仲淹が琴を嗜み、平生は「履霜操」一曲のみを彈奏して「范履霜」と稱されたことは著名であり、琴史の一コマを飾るエピソードである。本發表では、まずは范仲淹の琴學についての音樂觀を探り、そして琴曲「履霜操」との關わりを述べ、さらに宋代以降に「范履霜」の故事がどのように受容されていったかに焦點をあてる。

范仲淹の琴學は「與唐處士書」の内容から見ても、儒家思想を體現する士大夫が果たしてどのように音樂を享受すべきかという理想を追求するものと評し得る。琴曲「履霜操」は當時の一般的解釋では、西周の尹伯奇の作曲であり、繼母によって無實の罪に陥れられて荒野を彷徨いつつも、けっして親を恨むことなき「孝子」の真心を表わしていると見なされた。范仲淹がこの曲を酷愛したのも、音樂的魅力のみならず、官途における起伏が大きいなかで自らの志を尹伯奇の傳説に託し、例えば「親子＝君臣」のように投影している可能性が高いと解釋できる。范仲淹以後、「履霜操」は士大夫層に最も好まれる樂曲の一つになり、宋代を通じて大いに流行した。

なお現存の琴譜には「履霜操」と題される樂曲が數種ある。なかでも明代編纂の『西麓堂琴統』巻十二には同名の曲譜が収錄されているが、調律方法や指法「大蟹行」などから、それが古曲であると分析でき、あるいは范仲淹の奏でたバージョンと系統を同じくする可能性が高いと論證できる。發表時には、この復元演奏を行う。

康與之作品編年試探

松尾肇子

北宋から南宋にかけて生きた康與之は、秦檜に阿諛追従したとしてその人物評価ははなはだ芳しくないが、詞は複数の坊刻本が出版されるほど人氣があった。康與之は高い志を持って生きたわけではないが、南渡した北方出身者がどのように生きたのか、その一例として、関係した人物の経歴を参照しつつ生涯を整理し、各時期の文学的活動について、詩詞文を対象に検討した。

康與之の生涯は大きく四期に分けられる。第一期、無名だった北宋時期に編年できる作品はない。やがて南渡の混乱のなか「中興十策」によって名を挙げるも、官を追われ江南を流浪していた紹興八年(1138)までが第二期であり、「訴衷情令・長安懐古」詞及び蘇庠に送った「醜奴兒令」詞などが好評を博した。第三期は、秦檜の附庸となり朝廷で活躍したのち福建へ赴いた紹興二十五年(1155)までの、官僚だった時期である。秦檜への寿詞「喜遷鶯」詞

や「瑞鶴仙」詞をはじめとする応制詞は従来から注目されてきたが、その他にも秦檜の宴席では楽語を作り、朝廷における雅楽の再整備にも関わるなど、この時期の活躍の場は広い。だが臨安を離れると、外任宮観時期の「招眞詞竝記」の文章のほかには第三期に認定可能な作品がない。第四期は、秦檜の死去にともなって失脚した晩年である。配流先の新州では「洪聖王廟記」、広州では「創建風雷雨師殿記」や「玉虹洞二首」「鶴舒臺」の詩があり、広州では彼の詞集の校訂者となる陶定と交遊した。その後「醜奴兒令・自嶺表還臨安作」詞に首都に戻った感慨を詠じ、「訴衷情令・登鬱孤臺與施德初同讀坡詩作」詞を詠じた翌年の淳熙四年(1177)に官歴をもどされている。なお背景や事実の解釈に不詳の点は少なくなく、御教示を賜れれば幸甚に思います。

科挙と文学―唐宋の下第詩―

高津孝

科挙は、中国において隋代に始まり清朝末期にまで続いた官吏登用制度である。家柄ではなく試験に基づく制度として、公平、公正な側面を有するが、一面で大量の敗者をも生み出す制度でもあった。科挙の精神的プレッシャーは受験生個人のみならず、家族、宗族にも影響を与え、それは個人の精神生活、家族との関係、宗族の生き残り戦略にも波及した。本論考においては、唐宋代の下第詩を取り上げる。下第詩とは、科挙での不合格をテーマとする詩である。『全唐詩』では、「落第」「下第」「不第」などの語彙を詩題及び詩句中に含む詩歌が 250 首以上検出される。それらは詩人自身の不遇を詠ずる詩と落第した他者に宛てたものとに分かれる。前者は、自己表出を主とするものであるが、一方、他者へと与えられた後者は、他者への共感に基づく共感の文学であり、また、慰撫の作用を有する。当時の個人、家族、社会は科挙落第をどのように受け止め、それにどのように対処したのか。個人は自己の不遇をどのように慰めたのか。詩人は落胆する相手にどのように共感し、相手をどのように慰撫したのか。それらの詩歌は人々の感情の問題に密着した営為であるとともに、詩人が社会を、世界をどのような存在として認識していたかという世界観にも繋がるものである。本論は、下第詩を通じて、唐宋代の社会と文学との関係を論ずる。

第5回唐宋八大家シンポジウム

〔JSPS基盤研究（B）「唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究」主催、
日本宋代文学学会共催〕

サクラ（桜花）の漢名をめぐる近世日本の議論と宋詩

慶應義塾大学　合山林太郎

和歌など日本の詩歌には盛んに詠われているサクラ（日本における桜、桜花）が、中国の文学において、なぜほとんど取り上げられないのか、ということは、実際に中国の植生の状況を知らない江戸時代の日本の儒者や漢詩人にとって、重大な関心事であった。この問題についての議論は、本草学者なども巻き込みながら、中国の詩文中に登場する「桜」が、実際には、いかなる植物を指すのかについての検討へと発展してゆくこととなる。

サクラと文学との関係については、山田孝雄『桜史』(1941) という古典的な名著があり、その後も多くの研究が積み重ねられているが、本発表では、江戸時代の日本の漢文学及び本草学の領域における、この問題についての議論の大要を示し、その文化史的な意義を明らかにする。

中国の詩における「桜」(「山桜」など）の用例は、六朝や唐にもあるが、江戸時代の日本の儒学者や詩人たちに示唆を与えたのは、宋や明の詩であった。とくに、「山桜抱石映松枝」の句を含む王安石の「山桜」詩（『臨川先生文集』巻 28）は、多くの識者によって取り上げられ、これが中国にもサクラがあることを示す格好の証拠であると述べる者もいる一方で（山崎闇斎『桜之弁』)、ここに詠われている「山桜」は、日本のサクラとは異なるのではないかという疑念を抱く者もいた（林鵞峰「桜下問答」『鵞峰先生林学士文集』巻 61)。

18 世紀に入ると、本草学の発達により、中国の「桜花」と日本のサクラとの関係についても、より詳細な考察が行われるようになる。たとえば、貝原益軒は、中国における「桜花」はいわゆる「桜桃」であると主張する一方で、「垂糸海棠」は本邦のイトザクラとほぼ同種ではないかと推測している（『大和本草』巻 12)。また、松岡恕庵は、中国で言う「垂糸海棠」こそが、日本のサクラに当たるという見解を提示し（『怡顔斎桜品』)、これが、京都の儒者村瀬栲亭による『垂糸海棠詩纂』の編纂などの動きへとつながってゆく。

18 世紀後半以降、長崎に渡来した清・釈茝亭（黄檗道本）の「桜桃花」詩（『蕭鳴草』）に注目が集まるようになり（六如『葛原詩話』巻 3、山本北山『孝経楼詩話』第 65 条、大窪詩仏『詩聖堂詩話』巻 1 などに言及)、この詩に「東来初見此花奇」、すなわち、「日本に来てから初めてこの花の素晴らしさを知った」という意味の句があることから、儒者・詩人たちの間で、日本のサクラは中国には存在しないという認識が広がった。

以上のように、サクラは日本独自の花である、という共通理解が形成される過程においては、宋詩をはじめとする中国古典文学についての議論が、重要な役割を果たしたのである。

歐陽脩は二重人格か―詞の作成場面と受容環境に着目して―

九州大学　　東　　英寿

歐陽脩に関する先行研究を調べると、歐陽脩が二重人格（双重人格）であるという論文を幾つか見つけることができる。それは歐陽脩の詞に見られる俗艶、艶麗な内容に違和感を抱いて論じられたものである。たとえば「初めて情事に関わった女性の心の動き」や「若い女性のデートの様子」等の俗艶な詞が多々あり、その内容は当時の高級官僚で文章界の指導者でもあった歐陽脩の姿とは様相を異にし、確かに奇異な感がないわけではない。

多くの詞を残している歐陽脩にとって、詞の中に俗艶な内容を書き込む技量そのものがあったことは疑う余地はないであろう。そこで検討すべきは、実際に歐陽脩が俗艶な内容の詞を作ったかどうかということで、具体的には歐陽脩には俗艶な詞を作る場面があったのか、そしてそれが受容される環境があったのかということを考察することが重要だと思われる。

そこで、本発表では詞に書かれている文字、すなわち内容だけを見て判断を下すのではなく、詞が作成された場面や受容された環境に着目し歐陽脩に即して具体的に考察したい。それによって、果たして歐陽脩に二重人格の嫌いがあったかどうかということについて明らかにしたい。